

らしんばん



宮下
光令

東北大学大学院医学系研究科保健学専攻緩和ケア看護学分野

わたしを動かすちから

望ましい死に関する研究

もう10年近く前だと思う。毎晩、インタビューの SCRIPT と格闘していた。「日本人における望ましい死とは何か」という研究テーマの、終末期がん患者、家族、医師、看護師63人へのインタビューである。私も20数人のインタビューを担当した。その後、すべてのSCRIPTの分析は、私が担当したので、膨大なSCRIPTが目の前にあった。患者さん・ご家族のインタビューは1時間以内の方が多かったが、医療者は非常に詳細に語ってくださり、2時間という方もいた。

始めると、これは大変しんどい作業であった。SCRIPTの量もそれなりであったが、しんどかったのは別の理由である。SCRIPTを分析すると、望ましい死について「家族に支えられていること」「人生をまっとうしたと感じられること」「生きている価値を感じられること」「周りの人に感謝の気持ちをもてること」「伝えたいことを伝えられること」「仕事や家庭での役割を果たせること」などの医療とは直接的には関係がなさそうな事柄が多く出てきた。後に、スピリチュアルな側面として整理されたこれらの事柄は、当時の私を苦しめた。

当時、私は離婚をして子どもを失い、1人暮らしであった。分析をしながら「果たして自分は望ましい死を迎えられるのであろうか」とよく考えた。自分の置かれた環境を考えると、それは難しいように思えた。自分のしてきたことが自分に返ってきただけである。それを考えると分析の作業をしながらも頭の中にはさまざまなことが浮かび涙が出てきた。計らずも自分の人生を客観的にみつめることになることは、研究開始前には思わなかった。

叱られたこと

大学に就職し、研究をはじめた頃の私は仕事が遅かった。緊張感や切迫感がなかった。共同研究でもなかなか思うように進まず、進まないとその研究から自分を遠ざけたくなり、ダラダラ仕事をして、しばしば期限に遅れていた。それに業を煮やした共同研究者の先生から電話をもらい「おまえがダラダラしていて結果を出さない間に、病棟では苦しんで亡くなっていく患者さんがたくさんいることを忘れるな」と叱られた。これはショックだった。脳天を貫かれたような気持ちになった。自分の甘さや情けなさを再認識した。これを機に仕事のピッチを変えた。目の前にある課題から目を逸らさず取り組むことにした。形にすることが患者さんや被検者への最低限の貢献だと思い、ジャンクなものもあったが論文も結構書いた。自分の能力を超えた量の仕事を請けて、何とかこなし続けた。

私の専門は、緩和ケアの評価であり、患者の苦痛緩和に直結するものではないこ

とも多いが、だからこそ多くの量をこなそうと思った。あまり深く考えず、たくさんこなせば患者さんに貢献することも増えるのではないかと考えた。「自分が大学でのうのうとしている間にも、苦しんでいる患者さんがいる」ということを常に認識することは私の行動様式を変えた。今でも、ともするとこれを忘れがちになり、反省することしきりであるが、この経験が自分を少し変えたと思う。

臨床経験のコンプレックス

私は直接患者ケアをした経験が人より少ないので、臨床経験に対してコンプレックスがある。臨床経験が少ない自分が緩和ケアの研究をしていいかという悩みもあった。前述の「叱られた時」に「病棟には苦しんでいる患者さん」もいれば、それを克服しようと「奮闘している医療者」が大勢いると思った。現場の医療者は誰もが患者さんに対して直接的に貢献している。自分は直接的には貢献していない。自分はどうしたら貢献できるか考えた。しかし、よく分からなかったので、現場の人よりたくさん仕事をしようと思った。現場の人に仕事量で勝ちたいと思った。勝つとか負けるとか、くだらないことだと思うが、コンプレックスというのは得てしてそういうものである。

結果としてこのコンプレックスは、自分の仕事をいい方向に動かした。このコンプレックスは今も続いているし、今後も継続すると思う。このコンプレックスは地位や業績を積むことによって生まれる自分の奢りを抑制し、臨床の方々への敬意を忘れないという点で、自分にとってプラスだと思うことがある。臨床経験が長ければもっと良い研究ができるかもしれないと思うこともあるが、自分の場合は中途半端になくてよかったのかもしれないと思うことも多い。真実は何であろうか。

家族

幸いにして一昨年再婚し、娘も授かった。自分の望ましい死の実現に少し近づいた気がした。普通の男性なら結婚し子どもを設けると、守らなくてはならないものが出来たから仕事をがんばろうとか、家族を守るためにクビになったら困ると思うのかもしれない。だが、私は違った。子どもの無邪気な様子を見ると「ああ、この子は私が失業しても私を見捨てないだろうな」という気分になった（妻には見捨てられるかもしれないが）。そう思うと自分は正しいと思ったことを主張して、たとえそれで職を失うことになってもいいではないかと思えるようになった。子どもに恥ずかしくない仕事をするの方が重要だ。独身だった頃は、仕事だけが人生だった。失敗して職を失えば自分の存在自体が失われるような気がした。自分に少し余裕ができた気がする。これからも自分が正しいと思ったことは貫いて行こうと思う。

何を書いてもいいエッセイだと言われたので、あまり書く機会がない雑文を書いてみた。本学の医学部長と妻がこれを目にしないうことを祈っている。